セクシュアル・マイノリティ教職員研修

社会のさまざまな場面で話題となっているセクシュアル・マイノリティに関して、基本的な知識や情報を本学の教職員に提供することを目的として、2022年2月18日（金）に「東京都立大学セクシュアル・マイノリティ教職員研修」をオンラインで開催しました。ダイバーシティ推進室の藤山が講師を務め、性の捉え方やセクシュアル・マイノリティに関する用語の解説、パートナーシップ制度の導入状況や学校での対応状況など社会的な動向の紹介、本学での対応事例や対応の際の基本的な心構えなどについて講義を行いました。参加者からは「本学での取り組みについて伺うことができて勉強になりました。このような取組はより広く教員、職員に共有されるべきだと強く思いました」「自分もレインボーカラーのステッカーを貼る等、意識してみたいなと思いました」などの感想が寄せられました。また「研修を受けて、セクシュアル・マイノリティに限らずダイバーシティに関わる担当者または部署が南大沢以外にもあるとよいなと思いました」といった声も寄せられ、本学のさらなるダイバーシティ推進への期待感もうかがわれました。（藤山）

「セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン」へのアクセスはこちらから→

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」

都立大KIDSでは、毎日の保育の中でも季節を感じられるよう、工夫を凝らしています。特にこの2年ほどは、コロナ禍にあって外出もはばかられるような時期もありましたが、そんな時でも夏の七夕や秋のハロウィン、節分などにちなんだイベントや制作で、子どもたちにも保護者のみなさんにも、季節の移ろいを感じてもらえるようにしています。

まだまだ先が見通せない時期が続きますが、そんな中でもちょっとした工夫で、子どもたちに毎日を楽しく過ごしてもらえるよう、今日も先生方は創意工夫しています。

そんな園のようすをお伝えする「園だより」は、ダイバーシティ推進室のHPからもご覧いただけます。（藤山）

ご利用には事前登録が必要です。
詳細はWEBサイトをご覧ください。
東京都立大学ダイバーシティ推進室
一時保育施設のページ
http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html

コラム

ダイバーシティ・ブックレビュー（学長室主任：三田 祐樹子）

田中 兆子『徴産制』新潮文庫

SFです。舞台は2087年の日本、女性にのみ発症し、若年層ほど死亡率の高い悪性「スミダインフルエンザ」が発生。2年後にワクチンが開発され2090年には終息するが、その間日本人女性219万人（十代二十代が全体の85%）亡くなります。ここまではよしながふみ『大奥』の反対版のようですが、同年、可逆的に性別を変えることができる画期的性転換技術（?!）が開発され、2092年国民投票で「性転換の義務化による出生率上昇促進案」通称【徴産制】が成立。翌93年から満18~30歳の男子全てに最大24か月間女性になる義務を課す徴産制が施行されるところから始まります。物語は徴産制で性転換した青年、貧しい農村に育ったショウマ、政治家を志すハルト、徴産制に抵抗する知人の国外脱出を助けるタケルなど、別々の境遇・思惑から性転換し産役についた男性達の話です。コロナ禍の現代のような閉塞状況や、地球温暖化が進み食事は合成食物とサプリだけ等「ありそうな未来」の設定で、若い男性が国家から強要され＜女＞に性転換して味わう理不尽、女性ならば一度は体感したことのある「美しくあれ」「結婚しろ」「子供を産め」といった社会規範からの強要を、産役男がどうするかが描かれています。『徴産制』は結婚の必要がなくなった世界として描かれ、パートナーがいてもいなくても、誰もが自分なりの幸福を見いだせる希望が書かれています。興味の湧いた方は是非読んでみてください。

編集後記

鈴木氏の話しを聞きながら思い出した事柄がありました。ひと昔前住んでいた団地にアジアから都立大への留学生が越してきた事があったのです。パートナーが同郷だったことから、お茶を飲んだりしながら、日本での生活にまつわる話しや地域の案内をさせてもらいました。彼らは家族を連れて来日し、日本で学びながら「お隣さんとして」暮らしていたわけです。さて日本で何を感じ、母国へ何を持ち帰ったのでしょうか。（兼子）

東京都立大学　ダイバーシティ推進室
〒192-0397東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571　FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2022年3月31日
編集・発行

TMU DIVERSITY PROMOTION OFFICE

No.31 March 2022

Newsletter
ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY 東京都立大学

文化的多様性勉強会 スライド&トーク「NEIGHBORS」

Contents

1 文化的多様性勉強会「NEIGHBORS～お隣さんとしての技能実習生」鈴木竣也氏
2 南大沢キャンパス（南西エリア）「バリアフリーチェック講習会」の実施
寄稿「バリアフリーチェックを通して」
3 2021年度第2回バリアフリー講習会「障がい学生のキャリア発達支援"カカワリ"の意味」
コラム「広がった価値観」
コラム「ダイバーシティとスポーツ」
4 セクシュアル・マイノリティ教職員研修
東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
コラム「ダイバーシティ・ブックレビュー」

お隣さんとしての技能実習生

ダイバーシティ推進室では、これまで文化的多様性に関わる取組として、主に外国籍の教員や留学生などを対象とした、茶道や座禅など、日本文化の体験を通じた交流会を開催してきました。しかし、コロナ禍の影響により対面での交流会の開催が難しくなったこともあり、今年度は文化的多様性を学ぶことを目的として、いわゆる「技能実習制度」を利用して日本にやってきたベトナムの人々を中心とした外国人労働者の暮らしをテーマに作品制作を行っている写真家の鈴木竣也さんを講師にお招きし、2022年３月４日（金）にスライド&トークイベントを開催しました。

静岡県富士市出身の鈴木さんは、3年余りにわたるニュージーランドへの留学から帰国した際に、地元に技能実習生をはじめとする外国人労働者が多数生活するようになっていて、子どもの時から見慣れた風景の中に異なった文化や価値観を持った人たちが住んでいることに強い印象を受けたそうです。

鈴木さんは、家族が経営する会社で多くの技能実習生を受け入れていることもあり、外国人労働者の人たちと身近に接するようになります。その中で、彼らが単なる働き手ではなく、一人ひとりの人間として普通に生活している姿や、

見知った風景の扉の向こうに異文化があり、一人ひとりが生活していること、言うなれば「お隣さん」としてたくさんの外国人労働者が暮らしていることを、多くの人に知ってもらいたいと思うようになったといいます。

そうした点から、彼らを「技能実習生」や「外国人労働者」とひとくくりにして捉えるのではなく、一人ひとりの人間としてみる視点を持つことが大切だと、鈴木さんは指摘します。

司会者とのトークにおいては、外国人の学生や教職員が多数在籍している大学においても、特にダイバーシティ推進室をはじめとした大学の組織がどのようなサービスやサポートを提供することができるのかを考えるうえで、鈴木さんが指摘された視点は重要な意味を持つのではないかという方向性が示されました。

今回のスライド&トークは、鈴木さんの写真作品をたくさん紹介しながらのトークという形式だけでなく、内容的にも、これまでの文化的多様性に関するイベントとは一味違った、新しい試みとなりました。

参加者からは、「知ることが第一歩になると強く感じた」「情報は持っているつもりでしたが、写真は新鮮でした。事件・事故の際に報道される写真と違う、個人個人の生活の写真は、これからももっと発信してほしいと思いました」「本学でもいかにして『気づき』を促進していけるかが重要に思えます」などの感想が寄せられました。

イベント中の質問や意見も活発に交わされ、参加したみなさまにとって、実りあるひと時となったことがうかがえました。（藤山）

南大沢キャンパス（南西エリア）「バリアフリーチェック講習会」の実施

2022年2月17日（木）に南大沢キャンパスにて、バリアフリーチェック講習会を行いました。このイベントは、学生支援スタッフが日々利用する大学内を点検し、物理的なバリアを明らかにすることに主眼を置きつつ、個々の生活において新たな視座を獲得することも目的として行われた講習会です。プログラムは学生支援スタッフが中心となり企画し、南大沢キャンパス内の点検だけではなく、アイマスクや車いすを用いた疑似的な障がい者体験を含んだ内容となりました。

当日は16名の学生が参加しましたが、今年度は対面で集まる機会がなかなか得られず、お互いに「はじめまして」「Zoomで見たことがある」「Slackではコメントを読んでいます」と互いに話をしつつの点検作業となりました。

加えて、参加学生の中には、視覚障がいのある学生や聴覚障がいのある学生が含まれており、ただ疑似体験をするだけでなく、互いにコミュニケーションや移動に関する配慮も意識しつつ行いました。このことは特にコロナの影響もあり、障がいのある学生にかかわった経験が少ない1～2年生には緊張する場面もあったようでした。

今回行ったバリアフリーチェックの範囲は、南門からインフォメーションギャラリーまでの範囲に限定されていましたが、それらの範囲の中でも特に誰でもトイレや、各棟のエレベーターに加え、建物の内外にある各通路の点字ブロックや障害物の有無について点検するものでした。所要1時間弱の短い時間の中で行われましたが、実際に点検作業から戻ってくると、長年、障がいのある方々と関わってきた私でさえも、日々の大学における業務中に気が付かないようなバリアについて、学生支援スタッフから複数の報告がありました。

当日参加した学生支援スタッフの感想からは、「目隠しをして白杖を持って歩いてみると、今まで気づけなかったバリアがいくつも見つかり驚きました。そのため不便さというのは、使う本人の立場になってみないとなかなか気づけないものなのだなと感じました。ただ今回の体験から、バリアフリーかどうかを判断する視点やコツのようなものを少し得られた気がするので、普段から気にして見つけていこうと思います。」「目隠しをしての歩行や車椅子に乗るなど新しい体験が出来て良かったです。その目線にならないと気付かないことに気付くことができていい経験になりました。講習会の前と後だと学校が違った見え方をするようになりました。」など有意義な時間を過ごすことが出来た様子が示されました。

この講習会は次年度以降も継続して行う予定です。次年度の前期には図書館から理系エリアを対象とし開催する予定であり、点検の結果については本学のバリアフリー推進に資するため、学内において提言していきたいと考えています。来月には新年度を迎え、より多くの学生で賑やかになるキャンパスですが、是非みなさんも日々の大学生活の中でお気づきの点がありましたら、当室までご連絡をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いします。（益子）

「バリアフリーチェックを通して」

今回のバリアフリーチェックは、作業療法士を目指している私にとって、とても貴重な経験となりました。

授業で車いすの方が戸を通過するのに必要な最低幅は80㎝など具体的な数値を学んでいましたが、実際の生活でそれを確かめる機会はありませんでした。このバリアフリーチェックで実際に80㎝のひもを用意して戸の幅を測ることで、どのくらいだと通りにくいか自分の目で確認することができました。

また実際にアイマスクをして歩くことは、普段とは全く異なる感覚でした。自分が今どこにいるかわからない状態の場合、情報を得る手段は耳や白杖、誘導の方がいればその方の誘導しかありません。今回は普段過ごしているキャンパス内だったため、誘導の方に「今ここを歩いています」と言われると想像がつきました。しかし一度も行ったことのない場所であれば、想像することは難しいと感じました。自分が普段どれだけ目からの情報に頼っているか身をもって体験することができました。

他の参加者たちと「ここはこうだよね」と話しながらバリアフリーチェックをすることで交流を深めることができ、新しい視点も生まれました。また知識を学ぶだけでなく、実際に自分で経験することが大切だととても感じました。

今回の経験を今後の学習や次年度開催されるバリアフリーチェックに生かしていきたいと思います。

学生支援スタッフ
健康福祉学部 作業療法学科
1年　宇田川　侑里

2021年度　第2回 バリアフリー講習会「障がい学生のキャリア発達支援 〝カカワリ〟の意味」

2022年1月17日に今年度第2回目のバリアフリー講習会を行いました。今回のテーマは「キャリア発達支援×障がいのある学生に対する関わり」に焦点を当てたものであり、小田原短期大学専任講師の杉中拓央先生にご講演をいただきました。キャリア発達支援というタイトルからは、就職支援という言葉を想像される方も多くいらっしゃるかと思いますが、キャリア発達支援とは、将来を展望しつつ、今現在の自身の選択や位置づけについて理解を深めることを支援するというものです。

そのような観点から、障がいのある学生への支援を行う者として、あるいは日々窓口業務などで関わる教職員としてどういったことについて意識しつつ、関わる必要があるのか、といったことについてお話をいただきました。

当日のお話の中でも、特に、そのような立場で関わる参加者に対し、I didn't know anything but I knew I didn't know anything.（私は何も知らないが、そのことを私は知っている）という言葉を挙げたうえで、学生とは対等な関係性を意識しつつ関わることが重要であることをお話しされていたことが印象的でした。

今回の参加者は、そのようなテーマからも教職員の方が多く、実際に参加いただいた教職員の方からは「自分の専門と異なる分野の新しい用語などについて学ぶことができました。学生支援については、共感できることばかりで、今までの考え方やアプローチでよかったのかなと講義をうかがい、（少し）安心しました。ただ、今後も、学生さんの個性に向き合いながら支援していきたいと思いました。一人として同じ人はいないことを常に念頭に置いていきたいと思います。」「キャリア支援＝就業支援ではないということを改めて思いなおしました。キャリア、自分の人生を自分で決めていくためのサポートであることを再確認できました。滑走路の話は、そうか、と思いました。」といった感想などがありました。

また、参加者の方々からは、次年度以降のバリアフリー講習会に向けて、障がいのある学生との関わりにおいて必要な知見をより深めていきたいといったコメントや、障がいのある学生が実際に社会に出た後にどのように活躍しているのか、といったことについてテーマにあげてもらえると嬉しいというコメントもアンケートに回答がありました。次年度以降も皆さんから寄せられたテーマなどを踏まえつつ、バリアフリー講習会を行っていきたいと思います。是非、ご参加いただければと思いますので、よろしくお願いします。（益子）

コラム

「広がった価値観」

今や私にとって関わることが当たり前となったダイバー室ですが、入学当初はこれほどたくさんの学びの場となることは想像もできませんでした。

友達から教えてもらいその存在を知りました。最初は自分の学科も医療系だし、手話や支援に興味があるから行ってみようぐらいの気持ちで訪ねました。

もちろん手話や支援方法を学べたのはいい経験になりましたが、それ以上に関わることで新しい価値観や知識を知れたことが、私にとっての一番の財産です。

私は「障がい者」と「健常者」が互いの違いを意識せず、尊重し合う社会を実現するために、障がい者の社会参加を促進できる存在となりたいと思い、作業療法学科に進学しました。

とても大きすぎる目標であることは分かっていますが、このような場が増えることが、互いを尊重できる社会に少しずつ繋がっていくんだろうなと、ダイバー室は思わせてくれます。

ダイバー室はそれぞれが思っている意見を共有できる場であり、さらにそれを互いに理解しようとし、新しい価値観として受け入れようとする方々がたくさんいらっしゃいます。そんな素晴らしい方々と出会え、刺激をもらえることがとても幸せです！

学生支援スタッフ
健康福祉学部 作業療法学科
1年　三浦　琉奈

コラム

ダイバーシティとスポーツ ～スポーツ報道における女性の描かれ方～

東京オリパラに続いて、北京で冬季オリパラが開催されました。個人的には、女子カーリングチームをめぐる報道に注目していました。

前回の平昌大会では、銅メダルという成績以上に、北海道なまりの「そだねー」や、試合中の「もぐもぐタイム」がクローズアップされるなど、アスリートとしての側面よりも「女性らしさ」「かわいらしさ」に焦点化した報道が多く見られたことが印象に残っています。

一方で今回は、強豪チームと紙一重の戦いを続けるアスリートという描かれ方が主流となっていたように見受けられます。その結果、ドラマチックな予選リーグの展開が一層際立ち、銀メダルという結果だけでなく、各選手のアスリートとしての側面や、カーリングという競技の魅力が伝わるような報道になっていたように感じられます。

もちろん、アスリートの意外な一面を伝えることにも需要はあり、それなりの意味もあるでしょう。しかし、それが女性アスリートの側に多く見られること、そしてその多くは「かわいい」「美しい」「女性らしい」など、見られる存在としての女性を強調する男性側の視線であることなど、ジェンダーに起因する不均衡が強くみられることもまた事実です。

東京オリパラにあたって、IOCは「スポーツにおけるジェンダー平等、公平でインクルーシブな描写のための表象ガイドライン」を公表して、こうした表現への配慮の方法と具体的な取り組み事例を紹介しました（注1）。もちろん、すぐにすべての表現が変わるわけではありませんが、このガイドラインをきっかけに、メディアでのアスリートの描き方について、メディアを作る側も、それも見る側もジェンダーの視点から捉え直し、よりインクルーシブな伝え方、描き方を目指すことが期待されます。（藤山）

＊（注1）…「スポーツにおけるジェンダー平等、公平でインクルーシブな描写のための表象ガイドライン（日本語版）」 https://www.tokyo2020.jp/ja/unity-in-diversity/IOC_Portrayal%20GuidelinesJP%20.pdf